

31 中国伝統医学と道教（第32回 道教医学の歴史）

吉元 昭治

吉元医院

今総会では、1980年（昭和55年）より上記標題の発表も連続32回を算える。これを機に「道教医学」についての研究の足跡を振り返ってみたい。そこでまず演者の著書を並べてみる。

- ① 道教第2巻（道教と中医学）（1983）
- ② 道教と不老長寿の医学（1989）
- ③ 中国の靈籤・葉籤集成（1992）
- ④ 養生外史 日本編（1994）
- ⑤ 養生外史 中国編（1994）
- ⑥ 不老長寿と100の智慧（1995）
- ⑦ 不老長寿の旅（1998）
- ⑧ 老荘とその周辺（2011）
- ⑨ 鍼灸雑記（前半部、2011）

このうち⑦、⑧の間があるのは、丁度この時期『日本全国神話・伝記の旅』の取材に没頭していた頃と重なっている。

①は全3巻の一つで、戦後、道教研究者の第一・二世を網羅した恐らく最初かつ最大のもので、当時の研究レベルを集大成したもので、道教と中国医学の関係を真正面から向かい合った初めてのものであろう。この時はまだ「道教医学」という言葉は使っていなかった。

②は①を踏まえて①の各執筆者の各自の研究成果を表した著書の一つで、ここで初めて「道教医学」の言葉とその定義にふれたが、一部道教学者からはこの名称について反対を受けた。この書はその後重版し、中国・台湾（重版）・韓国で出版され、ほぼ東アジア全体で読まれたことになる。③は故酒井忠夫教授と共著で、葉籤部分は著者が受け持ち、台湾・香港・シンガポール等で収集したもので、世界最初のものと思われる。④、⑤は養生は道教医学の大きな部分を占め、その歴史的観点から書いた。⑥はポケット版で不老長寿に関する100の事項について解説をしたものである。

⑧は道家と道教の関係を老荘の事蹟や、中国古典から現在の影響までを述べ、さらに中国の古い書籍に当たるには漢字自体の理解が必要と考え、その祖字である甲骨文の初歩的記述を、⑨のその前半（後半は人体器械論を中心とした鍼灸に援用できる諸説や、新しい治療法を述べている）は道教医学とそれに関する中国、日本の古籍の鍼灸に関係するところを書いた。

一方、中国の事情を見ると、「道教と不老長寿の医学」の発表の一年前、『中国大百科全書、宗教巻』（1988）が出たが、その中に「道教医薬学」という言葉があり、次いで『中華道教大辞典』（1995）でもやはり「道教医薬学」という項があり、著者の本を紹介している。「道教医薬学」とは著者のいう「道教医学」と同じで、この「道教医学」が定着してくる。その後この方面の研究は中国では目覚ましく、次々と発刊され、中には蘆健民氏の『道教医学』（2001）とその名のズバリの名著が出てくる。中国の道教医学に関する著書の多くが、巻頭に著者の『道教と不老長寿の医学』の名を挙げ、誘発されたようである。

なお、「道教医学」という言葉は最近では、簡約した「道教医学」というものも現れてきている。以上の点を踏まえて総会で発表したい。

著者は最近、『道蔵』から中国医学に関係する経典を抽出、分類、整理する作業を行っている。